

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8202

京都市左京区田中大塚町49

075-701-3210

## 趣味とインターネット雑感

前東京支部長

和田 昌美 (昭36年卒)



### 古代史ブーム

高度成長時代の忙しさにまぎれずすっかり忘れてかけていたが、6、7年前から新聞の切り抜き癖が復活した。最新情報を手つとり早く知るには大変便利である。しかし、新聞記事は元来一服の清涼剤のようなもので、後々何度も読みかえすほどのものではない。「古代史」という袋に突っこんでおくだけのことであるが、そうしないと何んとなく落ちつかないという感じである。この頃から家内と一緒に神奈川県内の古代史探索グループに

顔をだすことにした。現在でも、月に1回程度のペースで、日帰り散策や3、4泊のバスツアーなどを楽しんでいる。長続きしている理由はこの会が一貫して「日本人のルーツを探る」ことにこだわっているからである。相模国の旧跡を歩いていても、話題はいつでも大和・河内や九州・韓半島などを行き来して、これが実に楽しい。さて、古代史に興味を持ちはじめたのは30年ほど前であろうか。魏誌倭人伝の耶馬台国の所在地論争や高松塚古墳の壁画の発見がマスコミを騒がせたところである。現在も衰えを見せない古代史ブームもちようどこの頃から始まったと思われる。この古代史ブームの到来には終戦という出来事が大きくかかわっている。周知のとおり、終戦と同時に皇国史観が完全に崩壊し、それに代わって渡来人史観が関連学会を支配していった。日

本の歴史の真実を知る快感とスリルが専門家ばかりでなく多くの一般人の心を虜にした。また、高度成長期の列島改造も古代史ブーム作りに一役かかってきた。旺盛な建設工事がきっかけとなって発見された重要遺跡は数え切れないほどある。いまでも、年に数千件の遺跡発掘報告があるという。

古代社会は、ゆっくりとしたペースではあるが一種の高度成長期を体験したといえる。農地、運河、古墳、都城などの建設によって人口と生産性が急速に拡大していったからである。この古代を戦後の高度成長期に再び掘り起こして、古代史ブームを惹き起こしたことは歴史の皮肉でもあり愉快である。

### ARPAネットに脱帽

2月1日に、年一度の洛友会本部の役員会に出席するため久しぶりに京都に出かけた。その日夜遅く帰宅してみると、スペースシャトル・コロンビアの空中分解事故のニュースが流れはじめたところであった。画面にはヒューストンの管制センターの悲痛な表情が頻々と映しだされていた。富士通入社9年目の69年の暮に初めて米国に出張したことが思いだされた。この年の7月にアポロ11号が打ち上げられ、人類史上初めて月面に上陸を果たした。ヒューストンのNASAセンターには、何台ものIBM社の最高速コンピュータが誇らしげに並んでいた。そして、この年は後年インターネット元年として回顧される記念すべき

年でもあった。

その頃、米国防省は軍事情報の一極集中を避けるための新しい通信システムの研究開発を進めていた。そして、この年の秋には、有名なARPAネットが西海岸のいくつかの大学の計算センターで動き出していた。簡単に言えば、複数のコンピュータを網目状にないで好きなコンピュータを自在に呼び出せるようにしたものだ。そして、このネットワークが自律的に繁殖できる性質を備えている点が斬新であった。後年のインターネットを支える基本原理の一部である。訪米中に訪問した大学で、ARPAネットの動作原理や操作方法について物めずらしく見聞したものだ。しかし、この技術の本質や将来の可能性を見通すことなど望むべくもなかった。

ともあれ、インターネットは今や不可欠の社会インフラとして定着した。ここ数年の驚異的な普及ぶりがこのインフラの優秀性の何よりの証拠である。コンピュータの歴史のなかで、知識を吸収したり自己を表現するといった人間のもつとも素朴な願望をこれほどスマートな方法で満たしてくれたことはかつてなかった。大げさに言えば、フォンノイマン型コンピュータの発明に匹敵するような革新的な出来事といってもよいのではないか。30数年前に、現在のインターネット文化の源流とも言うべきARPAネットの基本原理を考案した米国防技術陣に改めて脱帽せ

ざるをえない。

### 元祖エンジニアリング集団

大秦の広隆寺には有名な新羅伝来の弥勒菩薩がある。国宝第1号の名に恥じない逸品である。近くには、木島神社(養蚕神)や大酒神社(芸能神)などもあって楽しい。周知のとおり、大秦は古代秦氏ゆかりの地である。5世紀頃に朝鮮半島から先進的な文化と技術をたずさえて多くの渡来人がやってきた。秦氏はその中でも最大規模の殖産的氏族グループに成長していった。正倉院に残っている戸籍資料や当時の歴史書などに出てくる人名を調べてみると、秦氏とその係累が圧倒的な割合を占めるという。このことから秦氏の繁栄ぶりを伺い知ることが出来る。

秦氏は他の氏族と同様あらゆる分野で活躍をした。しかし、最大の強みは採鉱と鍛冶の技術に長けていたことである。言わば、当時の基幹産業を握っていたわけである。農具・武器の生産や開拓・灌漑・治水などの分野で主導権を握り急速に各地に進出していったものである。その足跡は秦・旗・波多・羽田等々の地名や人名に色濃く残っている。ちなみに、八幡神社と稲荷神社は両方で日本の神社の半数を占めるほどに広がっているが、宇佐八幡や伏見稲荷で古代秦氏の祖先神を祭ったのが始まりである。

さて、東大寺の大仏造営には豊前や河内の秦氏の技術力が不可欠であったらしい。また、平安京の

建設には、山城秦氏の財力と政治力が大いにものをいっただにちがいない。当時の民衆の度肝をぬくようなこれらの巨大プロジェクトはいずれも秦氏の独壇場だったのではないか。古代秦氏グループはまさに元祖エンジニアリング集団であった。渡来人が活躍した古代社会は開放性と開拓精神に満ちあふれていた。そして、我々はこのよいうな良い意味での渡来人的風土を、1000年後の現代に活かすに努めているだろうか。舶来崇拜的な安易な考え方を引きずってはいはしないだろうか。最近の関連業界の閉塞状況に照らしてみても、考えさせられるところである。

**ルーツを探る楽しみ**

日本人は実に祭りが好きだ。全国には数え切れないほどの祭りがある。祭りは神を奉ることに由来しており、昔から神社と里人によって伝承されてきた。近年は商業化の影響で山車や神輿が派手になりがちである。祭りの古い姿が失われたいことを願ってやまない。

さて、5世紀頃の各地の古墳から、腰に鈴鏡をぶら下げた巫女埴輪や太鼓・笛などをもった埴輪が出ていた。古墳の墓前で祖先の祭りをやっていたものであろう。神社や祭りの起源に深くかかわっていると考えられる。神社で鈴を振りながら舞う巫女舞は古代高句麗や旧満州あたりで発祥した北方シヤーマニズムの流れをくむという。韓国の巫堂(ムーダン)による神がかりの祭りも巫女舞を彷彿

とさせるものがある。一方、祭りに欠かせないのが神楽舞である。この神楽舞によく登場するのが鼻高面(天狗面)である。この面相は異様というほかないが、当初は高い鼻というよりは巨大な鼻であったらしい。そして、この巨大鼻のモデルは、奈良時代に唐から伝わった舞台芸能・伎楽にでてくるシルクロード系民族の仮面である。その後、中世の山岳宗教の影響などを受けながら現在のような姿に変わっていった。といった具合で、日本文化のルーツを探る楽しみは尽きることがない。

愛読書の一つに金達寿(キムタルス)著「日本の中の朝鮮文化」シリーズがある。渡来人が残した遺跡に注目しながら、20年余の踏査の結果を紀行文風に記録したものである。国内の朝鮮文化の痕跡の多さに驚かされる。著者の手にかかると日本中朝鮮だらけの観がある。さて、書店を覗いてみると、古代史関係の出版物の多さは相変わらずである。しかし、インターネットの急激な普及で状況が変わってきた。自治体や関連機関のホームページには、地元の歴史や民俗関係の情報が豊富なカラー写真とともに満載されている。遺跡発掘の最新トピックスも即座にネット上で公開される。古代史ファンにとつては涙のほどでありがたいことである。「足」と「書籍」と「ネット」を賢く使いわけると時代がやってきた。

とさせるものがある。一方、祭りに欠かせないのが神楽舞である。この神楽舞によく登場するのが鼻高面(天狗面)である。この面相は異様というほかないが、当初は高い鼻というよりは巨大な鼻であったらしい。そして、この巨大鼻のモデルは、奈良時代に唐から伝わった舞台芸能・伎楽にでてくるシルクロード系民族の仮面である。その後、中世の山岳宗教の影響などを受けながら現在のような姿に変わっていった。といった具合で、日本文化のルーツを探る楽しみは尽きることがない。

**おわりに**

洛友会においても、インターネットを利用した会務の電子化が進んでいる。会務の効率化のためには、本格的な電子化に移行するのにも一案である。しかし、種々のアンケート結果によると、約30%の会員には抵抗感があるようである。そして、悩ましいことに、この抵抗層に大変熱心な当会の理解者が多いと推測される。一方、会報1月号にある近藤会長の巻頭言によると、人間の平均寿命はますます伸びるとのことであった。30%という数字が減るのを待っているのは賢明ではないようだ。また、電子化を進めすぎると別の問題も出てくる。名簿広告による寄付集めが難しくなりそうだし、郵便で受けとる会報の触感も味わえなくなるかも知れない。当会のインターネット化は十分な時間をかけて慎重に進めるしかなさそうである。

幸運にも、洛友会50周年の節目の年に東京支部長を勤めさせてもらった。去る5月の年次総会で無事退任することができて肩の荷を下ろしたところである。その反動もあって、いささか脱線調の文面になったことをお許しねがいたい。今後は、一會員の立場で当会の将来を見まもっていくつもりである。在任中、本部および支部の多くのかたがたに格別なご支援とご協力をいただいた。深い謝意を表して筆をおくこととする。

おわりに  
洛友会においても、インターネットを利用した会務の電子化が進んでいる。会務の効率化のためには、本格的な電子化に移行するのにも一案である。しかし、種々のアンケート結果によると、約30%の会員には抵抗感があるようである。そして、悩ましいことに、この抵抗層に大変熱心な当会の理解者が多いと推測される。一方、会報1月号にある近藤会長の巻頭言によると、人間の平均寿命はますます伸びるとのことであった。30%という数字が減るのを待っているのは賢明ではないようだ。また、電子化を進めすぎると別の問題も出てくる。名簿広告による寄付集めが難しくなりそうだし、郵便で受けとる会報の触感も味わえなくなるかも知れない。当会のインターネット化は十分な時間をかけて慎重に進めるしかなさそうである。

**教室だより**

**京都大学における研究と教育——退官に当たって**

松波 弘之(昭37年卒)



昭和33(1958)年京都大学工学部電子工学科入学、昭和39(1964)年修士課程修了後、助手に採用されてから39年が経過しました。この間、半導体材料工学の研究に従事し、講義を担当させて頂きました。このたび、京都大学退官に当たり、機会を得ましたので、研究・教育、思い、将来のことなどを書かせていただきます。

**1 大学教官としての出発**

卒業研究は田中研究室で、「半導体pn接合を用いた電界効果トランジスタ」の試作に成功しました。修士課程では、自ら研究テーマを作る雰囲気の中で、当時の流れであった化合物半導体新材料の研究を始めましたが、大きな壁にぶち当たりました。そのような折り(1964年1月)、田中哲郎先生から助手に着任しないかとの、ま

さに「青天の霹靂」のお話があり、相当迷いましたが、挑戦のつもりでお受けしました。当時、半導体研究のスタッフはほぼゼロであり、修士課程修了後すぐの助手に研究をリードできるはずもなく、研究室として手探りの状態が続きました。加えて、研究費関連の書類や装置のメンテナンスなど、スタッフとしての仕事は予想外に多く、自分の研究の進展も滞りがちの状況でした。昭和45(1970)年に「Cdを含むII-V化合物半導体の研究」で博士学位論文をまとめました。新しい半導体材料内での電子の輸送現象に関するもので、これを通じて「半導体研究」の姿勢や方法論を身につけました。この経験から、「研究」とは「自己満足と自己嫌悪の繰り返し」と認識するようになりました。

**2 テーマ選択—半導体シリコンカーバイド(SiC)**

新しい研究テーマとして、電子の輸送だけでなく、エネルギー準位間を遷移する物理現象、すなわち、ルミネセンス(蛍光)に関連する材料の研究を始めたいと思いました。当時、可視発光ダイオードとして、赤色から緑色領域は実現されていましたが、青色発光の可能性のあるワイドギャップ半導体SiCを取り上げることになりました。これは、p型、n型が容易に形成される可能性があるからです。「SiCの研究は結晶成長から」ということで、(1)比較的短期間で成果の出そうな青色発光ダイオ



ードが市販されるようになった。スイッチング用の各種トランジスタの研究・開発が盛んに行われている。あと数年でトランジスタも市販されるようになるであろう。いずれも当初は小面積で電力容量は小さいが、直径3インチの基板が市販される段階にきているので、容量量、大容量の電力変換用パワーデバイス開発への基盤は整ったといえる。

各種の電気・電子装置、家電品、産業用機器、非常用電源、列車、高電圧直流送電など、パワーエレクトロニクスの応用分野はたいへん広い。これらの分野に、SiCを用いた小型、高効率、簡易冷却の半導体パワーデバイスが使われれば、電気エネルギーの有効利用が著しく期待できる。電気エネルギーを熱エネルギーとして放散することが少なくなれば、現有の発電配電システムにおいても十ぶんの電力余剰が生まれ、それだけで新規産業創成が可能となる(高効率半導体パワーデバイスが実現すれば、それによるエネルギーの有効利用分は国内において数百万kWに達するとの試算もある)。新規発電所の開発がなくなれば、そおれに伴って、環境への負荷が小さくなることは言うまでもない。

自動車のスタイルが大いに変わるであろう。石油埋蔵量、ならびに環境への負荷低減の課題からモータ駆動が注目され、エンジンとモータ共用や燃料電池によるモータ駆動など、すでに実用の域に入

った。限られた場所、高温部の存在、電池の長時間利用などを考えると、この分野でのパワー半導体には大きな変革が期待される。SiCデバイスを中核とする新しいパワーエレクトロニクスはまさにこの分野に最適である。

通信分野では、携帯電話の世代推移に伴って、大容量・高速無線信号伝送が必要となり、新たな基地局開設が進んでいる。この分野では、高周波領域での高出力発振器の小型化が強く望まれており、ここでも半導体SiCの展開が期待されている。

電気エネルギーを有効に利用することを通して、エネルギー使用を節減し、環境への負荷を低減して持続ある発展を遂げる技術をパワーテクノロジと名付けたい。そこでの主役は半導体SiCである。どこでも、誰でも、いつでも高品質のパワーユニットが活用できる時代が来れば、まさにSiCワールドと言える。

8 謝意

☆☆☆☆☆☆☆☆

京都大学における研究・教育活動は、電気系教室の方々への負荷が大きく、特に、電子物性工学専攻の先生方にはいろんな面でお世話になりました。研究面の進捗は研究室のスタッフに負っており、長年の支援に対して厚く感謝します。学生の皆さんとは、研究進捗、成果のまとめ、論文執筆などを通していろいろな議論を続けました。学生の展開する新しい分

野は私の守備範囲を広げることに有用であることを強く認識しました。数多くの論文博士のお世話をさせて頂いた頂きましたが、研究室では取り扱えない内容を勉強できると言う点で大いに意義がありました。外部の支援者に対してもお礼を申し上げます。特に、先が見えない頃のSiC研究に対して、じっくりと支援を続けて下さった方々への感謝は尽きません。皆様、ありがとうございました。

洛友会京都大学電気百周年記念事業決算報告

本事業はこれまでもご報告しておりますように、母校京都大学電気系関係研究室の研究活動を産業界にお知らせする情報誌Cueを発行して、産・学連携活動の活性化に貢献するという目的の事業を続

平成14年度収支計算書

平成14年4月1日～平成15年3月31日

収入の部 (単位:円)

賛助会費	700,000	企業7件
利息収入	8,381	定期利息
収入合計	708,381	
前期繰越収支差額	41,843,059	
収入合計	42,551,440	

支出の部 (単位:円)

事業費		
Cue刊行費	1,944,551	Cue No.9印刷送費 970,165円 Cue No.10印刷送費 974,386円
Cue編集費	50,000	浅野 望 Cue No.9
管理費		
事務委託費	1,200,000	
通信費	64,765	電話・切手代
支出合計	3,259,316	
次期繰越収支差額	39,292,124	
支出合計	42,551,440	

財産目録 (単位:円)

現金	79,974
普通預金	
みずほ銀行	3,244,975
三井住友銀行	106,619
定期預金	
みずほ銀行	
企業寄付	35,800,000
郵便貯金	60,556
資産合計	39,292,124

平成15年5月13日

上記収支計算書並びに財産目録を確認しました。

署名人 石川 順 三 (印)

けております。平成14年度はCue9号と10号が発行されました。この情報誌は百周年記念事業にご協力頂いた洛友会会員の皆様にもお送りしておりますので、電気系教室関連研究室(洛友会会員の出身母体)の活動状況を皆様にお知らせするメディアともなっております。一方賛助会員も14年度は、鉄道情報システム(株)、島田理化学工業(株)、ダイキン工業(株)、日本アイ・ビー・エム(株)、日立電線(株)、村田製作所の6社からご協賛頂き大変感謝しております。引き続きのご支援をお願い致します。また洛友会会員の方々と、ご所属の企業があらたに賛助会員としてご協力いただける場合には、本記念事業事務局

Tel: 075-752-5777  
Email: ionfon@osk43web.ne.jp

会員寄稿

香水健康法

太田 實 (昭24年卒)

自分でも奇妙なテーマだとは思いますが、ノーベル賞でも凡人が見れば意外な感じを受けるだろうと思う。小生は29年前に家内をなくしているのに、近くに香水でも置けば心が和むのではないかと思っ

洛友会本部事務局  
Tel: 075-701-3210  
Email: erakuyun@seapalor.jp  
以下に収支決算のご報告を致します。なおこの決算の監査は5月13日、京都大学大学院工学研究科電子工学専攻の石川順三教授にお願い致しました。  
木村磐根 (昭30年卒)

て、代用品として2年前に香水を買って、近くに置いてある。

身体や衣服に付けると現代社会では、男性は外出できない。

先日NHKで「ストレス解消法」というテーマをやっていた。それによると、ストレスのような、不快な刺激を受けると、脳の下の「扁桃体」という器官が血管を縮める物質を作って、結局脳梗塞、心筋梗塞を起こして寿命を縮めるという。これは男性に多い。これに反し、美しい絵とかラベンダー、水仙等の香りの良い花をおいておくとか、美しい音楽を聴いたりすると、心地良い刺激を受けると「扁桃体」は血管を拡張する物質を作るので、健康になるというものである。

香りのよいものといえば、一番手軽に得られるのは「香水」である。香りの良い花等はかさばるし費用もかなりかかる。香水ならば一吹きで、単価は少し高いかも知れないが分量が少ないから大したことはない。

これで小生の香水使用目的は、すっかり変わってしまった。当然健康増進を主体とする事になる。

この事は従来は男性が香水を使っていたにもかかわらず、全く考えられなかったことである。

この僅かな香水で人類の健康が改善できるならば、人類に光明をもたらすものである。ノーベル賞は直接的には、部分的にしかな人類に貢献しないが「香水健康法」は、猫も杓子も恩恵を被むることがで

きる。その意味では「大論文」かも知れない。

実際使ってみると非常に心地良く心もとけるような甘い感触で、思わず目をつぶって専ら香水を楽しんでしまう。これは「絵」や「音楽」よりも遙かに強い刺激ではないかと思う。

人間の「三大欲」は食欲、性欲、長命欲といわれるが、これに匹敵するようなものではないかと思う。「香欲」とでもいうかこれの良い点は、他人に迷惑を掛けない点である。むしろ他人と一緒に楽しめる物である。

香水は女性のものと決めてかかっていたらどうか。目的から考えて、男性専用のものを作る必要はなく、其の俣使えばよい。

最初は女性だけの化粧品売り場にはいることは若干のためらいはあった。客も全部女性である。

この男女同権の世の中に、何故香水の様な高級品を、女性だけに独占させてきたか不思議である。戦後大抵の物は、女性が男性から勝ち取ってきたのに、男性は香水だけは見向きもしなかった。その為に女性の平均寿命が長いのはなぜかろうか？

女性は自分の為に香水を使うのではなく、男性に楽しんで貰うために使っているのである。男性は香水を使っている女性と一緒に居るときだけその香水の香りを楽しんで来た。好ましい女性と付き合うことは別として、香水に関しては大変回りくどいことをしている

訳である。男性は自分の香水を自分で楽しめばよい。その方が余程手つとり早いし、コストも少なく済む。

女性が妻である時以外は、かなりの代価を払って付き合っているのであり、その時間は短い。一回の付き合いで、飲み物も含めて少なくとも一年分の香水が買える。

居室に少し香水を漂わせておけば非常に爽やかな雰囲気を作ることが出来る。竜宮城に住んでいるような感覚である。こんな安い健康法（道楽）は他に無い。

実際の経験から言うと、今78才であるがかなり健康になっている感じがする。快適な気分の生活をしている訳であるから、健康になつて当然である。目は良くなるし、不整脈は無くなって、その後も起らないし、目まいも無くなったままその後も起らない。もう日増しに衰えていく年である。

この健康法は非常に特異性が強いが、この考え方を受け入れた方はほとんど使って欲しい。目に見えてもりもり変わるといふことはないと思うが、一つ目立つことは食欲の増進である。体調が良くなつたら必ず食欲は増えてくる。大きなバロメーターである。年を取ると気付かないうちに食欲が減って痩せることがある。暑くなると食欲が無くなって夏痩せする人が多いが、これが消えないと効果は上がってこない。

一般にストレスの強い方は、目に見えなくてもかなりの効果が考

えられる。食欲の点で推定されるのも一つの方法である。ストレスで胃が痛むという方々は、この面で効果が有るかもしれない。一つのことをやっていたら、必ず効果は有るはずである。

### 60の手習い

中山道夫(昭33年卒)

近年、縁あってお茶を習い始めた。まさに60の手習いである。

始めてみると全く未知の世界であつただけに、予想もしなかつたことに遭遇している。苦勞したり、驚いたりしている。

たとえば、まず困つたのが、正座に伴う足の痺れである。子供の頃は正座は普通の生活の一部であり、勉強や食事の時に膝を崩すなど許されないうちで育つたのだから何とかなるとたか括って居たのだが、長い間の椅子生活に慣れた体では15分も座ると痛みと痺れで脂汗がにじみ立ち上がるのが大変な状況になる。周囲の皆さんは「お茶を頂くとき以外は楽にするように」と言つて下さるが、周囲が端然と正座されている中で新米一人が胡座をかき勇氣もなく、やせ我慢をしているのが実態である。痺れの少ない座り方や早い回復方法などを教えていただき、最近、多少慣れてきたとは言え長時間に亘ると直ぐには立ち上がれず恥ずかしい思いをしたりしている。

ただ、こればかりは正座も稽古と思つて、日常生活の中で正座を

繰り返すほかに対策はなさそうである。

つぎにぶつかったのが、お点前の基本動作や手順、或いは道具をはじめとする種々の知識が、覚えようとしてもなかなか覚えられないこと、つまり記憶の悪さである。

以前はこうではなかつた、と考えてみると、集中力の低下や記憶速度の低下はあるにせよ、一番大きいのは、ものごとを理解しその時は覚えたつもり覚えたはずなのに、少し時間がたつと思ひ出せないことが多い。覚えられないのではなく、せつかく覚えたことを忘れるのが早い(結局同じことである)為のようである。高校生の頃「勉強したことが覚えられないのは、忘れ方が足りないからだ」と先生に言われたことを思ひ出し、やはり反復練習が足りないのかとも思っている。

なかには、「人間にとつて忘れると言うことは生きていく上で大切な機能だ。おまえの場合その能力が向上していると、前向きに受け止め頑張ればよい」と励まして下さる方もある。しかし、つまるところは加齢に伴う自然現象(「年のせい」)であることも事実で、今更焦ることも無し、slow but steadyで行こうと考えている。

少々愚痴めいたことを申し上げたが、楽しい面もたくさんある。一つは人の輪が広がること、大勢の方々との新しい出会いから人の繋がりが大きく広がって行くのは

大変嬉しいことである。またよく解らないながら日本の伝統的な工芸・美術など、美しいものに接する機会が多くなるのも非常に楽しいことである。

そして、お茶席でも、稽古でも、先生や先輩の方々のお点前に接すると、茶道の奥深い境地には無縁の初心者ではあるが、ただ、「いいなあ」と感じる事が少なくないのもその一つである。何がよいのかと訊かれてもうまく説明できないが、茶室や道具のレイアウトと一連の動きが合理的で無駄がなく自然に流れるようなリズムでの進行の優雅さがそのような感じを与えてくれるようである。

また、茶道では形自体が相手への思いやりを重要な要素として組み立てられているが、更に、その席にある者がお互いへの自然な思いやりを持って和やかな雰囲気を作っていくのは素晴らしいことである、それを実感できればまさに至福のことであろうと思われる。

勿論、私はその様な境地には程遠く、「お茶とは、水をくみ湯を沸かし茶を点でて飲むことなり」との言葉通り諸々の作法を間違えないように努めるのが精一杯の部分であり、年齢相応に楽しい部分を少しでも増やす様に、上達に向けてチャレンジをして行きたい。

しかし、振り返ってみると自分なりに結構楽しんでおり、60の手習いを始めて良かったというのが正直な実感である。

## 近頃思うこと

三木隆司(昭62年卒)

最近、社会が本質的に変わりつつあるのではないかと感じることもある。閉塞感や後ろ向きな考え方があふれている世の中だが、もしかすると前向きに進んでいるその一部が今の状況かもしれない。

もとより素人考えなのだが、日頃感じている素朴な感覚を記してみれば、諸兄の中にはきつとよい知恵をお持ちの方もいらつしやるに違いない。そんな思いで筆を執ってみた。

ひところ、「失われた10年」という言葉をよく耳にした。そのときは何気なく受け入れていたのだが、この言葉には言外に、10年間へこんでいただけ、いざれ前の状態に戻る、その状態が正常なのだというニュアンスが潜んでいるように思う。

しかし考えようによっては、10年も続いたなら、それはもう特殊な状態ではなく基本的な状態とよばなければならぬのではなからうか。(話はそれるが、今20歳前後以下の人たちは、物心ついたときからずっと不景気だった。景気の良いときも悪いときも知っている私たちが考えるときも知って、現に日本の人口の何割かはそういう人たちになつていく。)

同時に世の中の、ものや消費に対する考え方も、一時的なものではなく確実に変わってきていると感ずる。かつては消費に対する欠

乏感のようなものがあつて、万遍なく消費する傾向を支えていた。ところが今の状況をいうなら、消費のつまみ食いである。

その背景には、ものの飽和感、価値基準の変化があると思う。ものの、豊かさに対する意味が変わりつつあるのだ。

「価格破壊」という言葉は、ただの特売とは違った意味を持つている。ものやサービスに対する価値感(これくらいはするだろうな)と、消費に動く価値感(これくらいなら買おうかな)を、大きく離してしまつた部分がある。

一度破壊された「価値感」が元に戻る、下がつた価格が元の値段になるということがあるだろうか?

飢饉や極端な物資の欠乏でもあれば話は別だが、もはや価値基準が全く相対化・流動化している流れ、単純に価格の低下と生産性の増大を結び付けられない状況は、とどめようがないように思われる。

潜在した欲望をたたき起こして成り立つ産業(ある意味資本主義社会)の限界が近づいているのかもしれない。

すなわち、今まで普通だと思つてきたことが普通でなくなり、普通でなかったことが普通になつてきているということである。現在の状況は改善してゆかねばならぬ。といって、前と同じような状態に戻そうという考えは捨てた方がいいのかもしれない。もし変わるとすれば、以前とは違う新しい状態ではないだろうか。

ところで、よく「情報化」とか「パラダイム・シフト」という言葉が使われる。が、そこで語られている内容は、結局は産業革命以来のパラダイムの範疇を超えていないことが多かったように思う。産業のスピードが増す、高付加価値なものにシフトする、といった類である。

高度の情報化は、確かにスピードをもたらし、優位性を求めて、情報化はさらなる情報を要求する。知らず知らずのうちに、産業はより多くの情報がなければたゆかないように組み替えられた。それを支えている生活者の生活もつられて、組み替えられている。

このようにして情報は独立して肥大化していく。しかしそもそも情報は、それを使って何か違う価値を生み出すための材料にしか過ぎない。もともとパブルな要素を持つていたということだ。(一方で、本当にあつた方がよい情報(食品の安全性、子育て……)にはむしろ欠乏感があるという現象も生じている。)

また、情報化と技術の成熟は、構造的な生産過剰・供給過剰をもたらし、儲かりそうなことは、すぐさまみんなが一斉に始めてしまふからである。

そこで生じる過当競争・価格低下に対して、高付加価値なものへのシフトが切り札のように入れられることがある。しかし、高付加価値は高機能とは違う。価値はお金を出す人が決めることであり、そ

れが認められなければ高付加価値とはなり得ない。

本来機械文明(コンピュータも含め)の発展は、単純作業、重労働などから人間を解放するはずだった。しかし実際は、種類は変わったかもしれないが、人間が処理しなければならぬ作業量・情報量を増やす結果になつていく。高機能⇨高付加価値ではないことに、人々は気づき始めているのかもしれない。

つまりは、産業と生活が乖離してきているのだ。それが常に一種のパブル的な要素を含むことになつていく。これが現在の慌ただしさや閉塞感を生む一因となつていくのではなからうか。

本当のパラダイム・シフトは、このような状況から、今から始まるのではないだろうか。社会の基調が、まさに未体験のものに変わろうとしている、ということである。

昨今、構造改革だ、経済政策だという際に、よくビジョンという言葉が使われる。それは確かに大事な気がする。しかし翻つて自分を考えてみると、どのような社会か、具体的なものがあるだろうか?例えば、優位性を求めるのであれば、競争には際限がない。しかし、それが望みだろうか?

もしかするとビジョンを描くことなど、到底できないことかもしれない。ならば、私たちの今まさに望むこと、感性のようなものが重要になつてきそうである。

日本人は、もの作りが得意とよくいわれてきた。しかし、大昔からの作りが飛び抜けて秀でていたかという点、必ずしもそうではなかったような気がする。むしろその身上は、柔軟性、機を見る器用さと、勤勉で儉約といわれた粘り強さだったのではないだろうか。さらに、アジア的な調和の感覚が染みついている。

このようなしなやかで強い特質に、これからの時代を解く鍵があると信じてたい。

世の中には閉塞感が漂っているが、その中でいたずらに悲観的になるのではなく、またその逆でもなく、技術者も、医学がそうであるのと同じような大きな曲がり角に立っていることを認識して、今までと違った思考を求められているのではないか……。

とりとめもない話ではあったけれど、ふと思うのは、もしかしたら私たちは本当に、人類史上の大きな転換点に立ちつつあるのではないかとということなのである。

### 海外赴任の思い出

西村 長実(平4年卒)

卒業してから8年半くらい過ぎましたが、会社に入ってから思い出として浮かんでくるのは、1998年から2年間イギリスに赴任していたことです。業務は、衛星携帯電話の設計開発でしたが、ベースバンド処理部の技術者としての赴任でした。

赴任地はロンドンから西へ車で50分程度の位置にあるロックフェイステイバルで有名な都市でした。会社からは車で10分のところに住んでいましたので通勤が大変楽でした。多くの現地人も30分程度以内の通勤時間なので、人口密度が高すぎる日本の首都圏ではうらやましいものです。また、現地人はほとんど残業しません。早く帰って趣味の時間や家族との時間を大切にしているようです。トラブルの際は残業していましたが、残業が続いたときは、会社から家のほうに花束を贈ったりしていたようです。家族を犠牲にしてまで働いてもらったことに対する家族への配慮と聞きました。日本ではありえないことですが、家族を大切にするという気持ちはすばらしいものだと思います。(最近では、子供と充分に接してあげていないのではないかと心配しています。)

また、現地人の転職の早さにもびっくりしました。3年から5年くらいで転職してキャリアアップをはかっているようでした。日本と違って転職の機会に恵まれている点はうらやましく思われました。転職が多いせいか、現地人は交渉がうまいように感じました。逆に、技術はなくても口先だけでもなんとかやっている人もいますが、とにかく何でも主張しないと損だなと思いました。

あちらで生活してみても特に子供ができてから感じたことですが、イギリスは、子供をもつ女性が働

きやすい環境にあると感じました。ベビーシッターや託児所が日本より充実しています。実際、私の家内が語学学校に行くときには、学校に託児所があって低料金で預かってもらっていました。日本では、雇用制度が変更の過程にあると思いますが、会社側の制度改革だけではなく、転職しやすい風土や託児所の充実等が追いついていかなければならないように感じます。

日本だと、休みの日は、家でごろごろしていることも多いのですが、赴任中は活動的に過ごしました。旅行は、ヨーロッパというところとでいろいろな国に行きました。なにせ、東京ー大阪を飛行機で飛ぶような感覚でフランスにいけるのですから。中でも一番記憶に残っているのは、一週間カナリア島でゆっくり過ごしたことです。今までの旅行は観光名所を次々に訪ねていくような旅行だっただけに、のんびり過ごすのもいいもんだなあと感じました。ただ、そこはスペイン領だけに英語が通じる場所が限られていたので、旅行から戻ってイギリスで英語が普通に通じたときは、不思議なことにホッとした。また、クリスマスまでの旅行は気をつけなければいけないことも実感しました。バスや電車の公共機関が運休になるからです。店がしまったりするのは、日本の正月のような感じなので理解できたのですが、電車がとまってしまふのには参りました。ちょうど12月25日出発の旅行にいったの

ですが、クリスマスが移動日の旅行は控えたほうがよいです。結局、空港までタクシーでいったのですが、通常時の3倍の運賃をとられました。移動先でもお店がしまっていたので、家内は悔しがっていました。

イギリス国内いろんなところにいきました。あちらでは、高速道路が無料なので、もっぱら車で旅行していました。日本の高速道路がなぜ赤字になるかは不思議ではありませんが、イギリスではトンネルとかほとんどなくほぼ平坦な道路なので、建設費が安いのでしょう。渋滞も日本ほどひどくないので、運転も快適です。

ゴルフも飽きるほどしました。日本と違って昼休みが入らないところがいいです。18ホールまわったらビールと食事を頂き、あわよくばもう1ラウンドまわろうかといった感じでした。でも帰国後は2回しかゴルフにいらなくて、先日一年半ぶりにまわったときは、言うに及ばないスコアでした。なかなか練習する機会もないのですが、次回までにはもう少し練習しておきたいと思っています。

長々とりましたが、イギリスでの2年間は、人生において貴重な経験でした。現地の人とのふれあいの中で色々なことを学ぶことができたと感じています。日本に戻ってきてからは2年半くらい経ちますが、帰国後は国内出張が少ない日々が続いています。帰国当初はやはり日本がいいなあと思

っていましたが、暫く経つとあちらでの生活が懐かしくなりました。大学の友人の中にも海外進出している人が多くなってきました。が、海外生活が羨ましく思えます。言葉の壁は多少ありましたが、人間らしい生活をおくっていたからでしょうか。忙しいだけの単純な日々が続いているので、何かしら良い刺激が欲しい今日この頃です。

### 父として思うこと

引馬 章裕(平5年卒)

「パパ、かいしゃいかないの」休みの日にパジャマでのんびりしている私に対して、もうすぐ3歳になる我が家の娘が言った。

平日は忙しく働いており、娘とのコミュニケーションも充分とはいえない状況であるが、休みの日には子供に父親の存在を忘れられないようにと、できるだけ子供と一緒に過ごそう努めている今日この頃である。

最近、犯罪の低年齢化がすすむなか、どうしてこんな残酷な事件が起こるのだろうと不思議に思うことがある。むしゃくしゃしていつから誰でもいい理由で犯罪を犯す若者のニュースを見る度に、胸が痛くなる。

都会では、昔のご近所づきあいがなくなり、隣に住んでいる人の顔も知らないことがよくある。実は、私もその一人であるが、昔は、自分の子供、他人の子供という分

け隔てなく、悪いことは悪い、良いことは良いと注意していたという話をよく聞か、今はそういう近所づきあいもなく、自分、自分、他人は他人という世の中に変わってしまったようだ。

なぜ、そのような変化が起こったのか、私なりに考えて見ると、生活水準が豊かになるにつれ、人間関係が希薄になっているのではないだろうか。昔は今ほど物があふれている時代ではなく、皆が困結し、助け合っていたのかなければ生きていけない世の中だったのが、今は、ほどほどの収入があれば、必要なものはすべて手に入るため、他人の助けを借りなくても生きていける。だから、煩わしい近所をわざわざする必要はない。というような考え方に変化しているように感じる。また、核家族化がすすみ、地元を離れて生活する人も多いため、より一層近所付き合いが希薄になってきているのだろう。どちらがよかったのかというところ、一概に結論は出ないと思うが、少なくとも、現代の生活においては昔ほど他人と触れる機会が少ないため、親の果たす役割が重要になってきていると感じる。

そしてふと自分は父親らしくある信念をもって子供に接しているか不安に思い考えて見ると、時間が少ないわりにはパパっ子である娘は人を見て物事を言うようになり私には無理難題をいってきたりする。多少あまやかしたのがいけなかったのだから。育児雑誌

によると3歳という時期は、第一次反抗期といわれているようで、親に対して反抗しているのではなく、自己主張を始める時期だそう。

家の子供も自分でできそうなこと、興味のあることは自分でやってみようと思うらしく、はしを使つてご飯を食べようしたり、お菓子の袋を自分で開けようとしたりする。決してうまくできるわけではないが、やろうとする気持ちが大それたと思うので、多少時間がかかっても応援してあげている。どこかで親が見ているから大丈夫という安心感を与えてあげて、いろいろなことに挑戦し、自分の才能を自由に伸ばして欲しい。

一方で、父親としての威厳は必要だ。しかし、現状娘について甘くなってしまう私には、悪いことは悪いという毅然とした態度も必要である。

ともかくにも求めすぎず、期待しすぎず、じっくり楽しみながら子育てを続けていきたいと思う。明日は、子供のおゆうぎ発表会だ、出来栄えはともかく、終わったら誉めてあげたいと思う。

本部だより

本部総会報告

平成15年度本部総会は5月25日(日)、東京目黒の八芳園で東京支部総会に引き続いて開催され、64

名が出席されました。近藤会長の挨拶の後、各議案の説明と審議が行われ、平成14年度事業報告と収支決算書は全会一致で承認されました。表(1)収入は学部会費が約57万円減少(63%減)したが、支出も各科目で節減の結果、約37万円(53%)減少したので次期繰越額は約18万円弱の減少にとどまった決算となりました。

続いて平成15年度の事業計画案と収支予算案の審議に入り、説明の後全会一致で承認されました。表(2)に平成15年度収支予算書を掲げましたが、本年も従来どおりの形式で名簿が改訂されます。ついで役員任期満了にともない改選が行われ、以下の役員が決定しました。会長 近藤文治(昭18年卒)副会長 大嶋幸一(昭19年卒)(留)

池上文夫(昭22年卒)(留) 奥村浩士(昭41年卒)(新) 長尾真(昭34年卒)(新) 長尾真氏は平成16年1月就任予定。続いて木村磐根幹事より、電気百周年記念事業の決算報告(別掲記事ご参照)、荒木光彦教授による「桂キャンパス移転計画」など教室の近況が報告され本部総会は定刻に修了しました。事務局記

表(2) 平成15年度収支予算

(平成15年4月1日~平成16年3月31日)

Table with 4 columns: 科, 目, 予算額, 備考. Rows include 会費, 預金利子, 広告掲載料, etc.

表(1) 平成14年度収支決算報告書

(平成14年4月1日~平成15年3月31日)

Table with 4 columns: 科, 目, 予算額, 決算額. Rows include 会費, 預金利子, 広告掲載料, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科, 目, 予算額, 備考. Rows include 名簿編集費, 印刷費, 送付費, etc.

2. 支出の部 (単位 円)

Table with 4 columns: 科, 目, 予算額, 決算額. Rows include 名簿編集費, 印刷費, 送付費, etc.

平成15年4月24日、応用科学研究所において、領収書、帳簿等関係書類を慎重に監査し、支出及び決算が適正であると認めました。



同窓会だより

昭和10年クラス会報告

昭和10年卒業の昭十会は現在10名が存命中で、生存率は二割で長命の方でしょう。毎年クラス会を開催するつもりですが先のこととは分かりません。昨年は京都で開催し、翌日は保津川下りを楽しみました。今年も久方ぶりに関東で開くことになり、5月14日熱海で懇親会を開催し旧交を温め、翌日は箱根観光めぐり行いました。当日は天候に恵まれず箱根めぐりも小雨の中でした。

箱根関所跡見学、芦ノ湖遊覧船で箱根園まで行き、箱根プリンスホテルで昼食後、水族館見物、大涌谷、小涌谷を経て小田原に着き解散しました。明年も開催したい希望も出ましたが、皆が90才以上



のご老体ばかりですから、来年年になってみないと結論はできません。因みに今回の参加者は次の通りです。(敬称略)

神谷、小寺同夫人、高田同夫人、林同夫人、清水 以上8名

清水威寛(昭10年卒) 記

支部だより

九州支部総会報告

平成15年5月9日(金)、福岡市博多駅前のホテルステーションプラザにて、平成15年度九州支部総会を開催しました。本部から近藤文治会長をお迎えし、九州支部からは安田大先輩(昭12年卒)をはじめ、主に福岡在住の会員26名が出席しました。

総会に先立ち、九州支部で毎年恒例のカクテルパーティーを催しました。このパーティーは、総会開始30分前から三々五々集まった出席者が、グラスを片手に歓談するといふものですが、今年開始1時間前から20名以上も集まり、例年以上の盛況でした。

総会は、岡支部長の挨拶で始まり、今年九州支部にとって設立50周年という記念の年を迎え、これまで以上に楽しい支部にしたいとの抱負を述べられました。

引き続き、近藤会長から挨拶をいただき、本格的に始まった桂キャンパスへの移転の状況や、



昭和27年の本部設立時から現在までの洛友会に関する思い出、大学の独立行政法人化に関する動向などのお話を伺いました。

その後、徳永幹事から平成14年度活動実績・会計の報告及び平成15年度活動計画案の説明を行い、満場一致で承認されました。

懇親会は、増岡先輩(昭21年卒)の乾杯の音頭で始まり、参加者全員酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気、昔話や近況報告などに花を咲かせました。

また、今年例年以上に若手の出席者が多く、2回目の出席となる永松さん(平10年卒)、今年社人になったばかりで初出席の留高さん(平13年卒)には、諸先輩方の前で自己紹介していただきま

北海道支部総会報告

去る5月10日(土)札幌駅前前の札幌センチュリーロイヤルホテルにて、北海道支部総会を開催しました。

まず、芝山支部長より挨拶ならびに洛友会、京都大学の現在の状況について報告がありました。続いて幹事より支部会員の状況の説明後、会計報告を行い満場一致で承認されました。

引き続き前年まで25年間支部長を務められた池内前支部長の乾杯のご発声により懇親会となりました。



た。今回の出席者は9名であり、例年どおり少人数ではあります。が、和やかに進み、ご出席の皆さんの近況報告でも話題が広がりました。参加者の年齢差は約50歳にもなりますが、昔話や最近の話題などで盛り上がりました。北海道からはなかなか京都を訪れることはできませんが、この集まりでは、皆さん京都で過ごした時代を思い出されるようです。

また、芝山支部長が執筆され、洛友会会報の50周年記念特別号に掲載された「北海道支部の50年」についても話題となり、過去の歴史等についてもお話を伺うことができました。

毎年のことながら、予定した2時間はあつという間に過ぎ、最後は西村正巳氏(昭12年卒)の乾杯で、北海道支部設立50周年となる1年後の再会を楽しみに、お開きとなりました。

木元伸一(平元年卒) 記

中国支部総会報告

平成15年5月19日(月)広島全日空ホテルにおいて、中国支部創立50周年となる記念すべき平成15年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会は、本部から近藤会長、教室から萩原先生をお迎えし、中国地方各地から34名の会員の参加を得て盛大に開催されました。

総会は、開会にあたり、故松谷



前支部長のご冥福をお祈りし黙禱を捧げた後、池内支部長からご挨拶をいただき、引き続き支部事務局から支部会員異動状況、平成14年度支部活動状況及び平成15年度活動計画を報告、会計決算、予算案について説明を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

続いて近藤先生から洛友会本部の近況について、萩原先生から大学の近況について、それぞれお話をいただき、当初予定していた全ての議事を終了しました。

写場での記念撮影の後、全日空ホテル最上階の懇親会会場において、門野内先輩の乾杯の音頭で支部恒例の懇親会の始まりとなりました。支部事務局では「洛友会中国支部の変遷と近況」と題し、中国支部創立から今日までの歩みと

会員の皆様から頂いた近況をまとめた冊子を出席者の皆様にお配りするとともに、第1回から第49回までの各開催回の集合写真や本報記事等を展示しました。

ホテルの最上階から広島島の夜景を眺めながら、支部会員の思いの話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で会が進行し大いに懇親を深めた後、近藤会長の挨拶と一本締めで支部懇親会の閉会となりました。

柴田研司 (平4年卒) 記

### 東京支部総会報告

平成15年5月25日(日)に目黒の八芳園にて東京支部の支部総会を開催しました。今年度は本部総会も併せて開催され、本部から近藤文治会長、池上文夫副会長以下6名様を来賓・本部役員として迎え、東京支部の58名と合わせて総勢64名による会合となりました。

支部総会は午後2時に和田支部長による挨拶で始まり、柴沼総務幹事から平成14年度の行事、予算・決算などの説明、前川監事から会計監査結果の報告がありました。決算内容は拍手をもって承認されました。

次に、柴沼総務幹事から支部会則の用語明確化などの修正案の説明があり、案通りの制定が、拍手をもって承認されました。引き続き次期役員候補の紹介が行われ承認されました。平成15年度の新

役員は支部長藤江恂治、副支部長馬場征彦、総務幹事沢辺学、会計幹事田村俊之、監事関清三の5名です。和田支部長は退任に際して、役員人選など苦労する局面もあったものの、洛友会設立50周年の節目において、会員各位のご支援により、計画に沿った運営ができたことについて感謝を述べられました。

その後、役員交代し藤江新支部長より、会費納入率の向上策を積極的に検討するとともに、景気の低迷という環境下において、名簿広告に一部依存している収入構造の改善や他学部や他大学との交流について意見交換を重ね提案していくことで、先駆的役割を担う支部を目指したい、との挨拶がありました。

引き続き沢辺新総務幹事より、平成15年度の行事、予算計画が説明され承認されました。その後平成14年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿8名、喜寿14名)のお祝いを行い、出席されていた喜寿の三浦様(昭24年卒)、澤田様(昭25年卒)、山田様(昭25年卒)に代表として、お祝いの目録が手渡されました。

午後3時より洛友会本部総会が開催されました。同日、同会場で午後4時より、洛友会の会員でもある日経B P社日経コンピュータ編集長横田英史氏(昭55年卒)をお招きし、「ITの光と影」これぞいいのか日本の「IT」 というテーマで講演会を開催しました。開会に際し、和



田前支部長より、講師の略歴の紹介、本講演会参加への感謝が述べられました。横田氏からは、ITはツールであり目的ではない、情報技術は既に充分揃っているの

で、知恵を働かせて「何をやるか」ということが最も重要である。ユビキタスの時代に入って、ネット対応の携帯電話が普及したモバイル大国日本にチャンスが到来しているはずである。まずはコンピュータ、通信、家電、自動車、ゲームなどを融合したブランドデザインが必要であるとの提言がありました。日本のIT業界の抱えている本質的な問題として、外注化・分業化の進展によりプロジェクトマネジメントのできる経験豊富なSEが不足し、その育成が充分でないこと、技術力の充分でないこと、報酬額が比較的小さいアジアの優秀なエンジニアとの競争が必要となつてい

午後6時前より恒例の懇親会に移りました。馬場新副支部長の挨拶の後、池上副会長の乾杯ご発声の方々の談笑が広がるなか、米寿、喜寿を迎えられた方々を代表して喜寿の三浦様、澤田様、山田様に記念のスピーチを頂きました。伊藤様(昭54年卒)による東京支部ホームページの紹介のスピーチにつき、山田様のリードによる恒例の琵琶湖周航の歌の合唱があり、最後は田村新会計幹事の中締めにより午後7時半頃に散会いたしました。

田村俊之(昭60年卒) 記

### 東京支部見学会報告

降雪予報が出るほどの小寒い天候の中、平成15年3月6日(木)に、46名の参加者による東京支部見学会を実施しました。今回はゲノム研究の最前線の見学会を目的として理化学研究所横浜研究所ゲノム科学総合センター (URL: <http://www.gsc.riken.go.jp/index.html>) を訪問しました。ゲノム科学総合センターでは、DNAやタンパク質等の生体構成分子の研究施設や研究成果を見学させていただきました。短時間の訪問でしたが、最先端研究見学の貴重な機会を提供いただいた理化学研究所の皆様には御礼申し上げます。当日は、朝8時45分に東京駅の新丸の内ビルディング前に集合し、総勢46名がバスに乗りして9

時5分に出発しました。横浜の赤レンガ倉庫や大棧橋を經由して神奈川県立歴史博物館に到着しました。65歳以上が入館料無料のため入館料はほとんど払わずに済みまし。ボランティアの説明員5名の方に神奈川県石器時代から現代までの歴史を詳細に解説いただき、約1時間の滞在時間もアツという間に過ぎてしまいました。昼食を中華街の中華料理店「翠華」で済ませた後、見学先の理化学研究所に向かいました。

13時30分頃に理化学研究所横浜研究所に到着し、まず研究所の概要をお伺いしました。理化学研究所は、文部科学省所管の特殊法人（独立行政法人へ移行予定）として、物理学、工学、化学、生物学、医学などの分野で幅広い研究をされており、その国内研究拠点の一つである横浜研究所は、ゲノム科学総合研究センター、

植物科学研究センター、遺伝子多型研究センター、免疫・アレルギー研究センターの4センターで構成されています。

今回訪問したゲノム科学総合研究センターでは遺伝子、ゲノム、タンパク質の構造と機能に関する研究を行っており、2班に分かれて南研究棟とNMR（核磁気共鳴装置）棟を見学させていただきました。ゲノムのサイズは人体を東京から九州までの長さとした場合に1円玉のサイズであるとの話が印象的でした。

南研究棟ではDNAの保存、抽出、培養などの設備やDNA構造（塩基配列）を高速に解析するシステムなどを見学し、DNA鑑定の方法などを交えて分かりやすく説明いただきました。またNMR棟では、タンパク質の構造解析のための大規模なNMR装置を2種見学しました。タンパク質の基本構造約1万種を国際協力で解明する計画のうち理化学研究所では約3千種解析していくとのこと。

その後ズーラシア動物園を訪問予定でしたが、予定時間も大幅に過ぎ小雨もパラつく天候のため、そのままバスに乗車し、16時過ぎに横浜駅で、17時過ぎに東京丸の内側で解散しました。

沢辺 学（昭57年卒）記

### 四国支部総会報告

6月6日（金）、昨年と同様、高松市内のホテル「全日空ホテル」

メント高松」において第48回洛友会四国支部総会が開催されました。本部から近藤文治会長、教室から大澤教授のご出席を頂き、四国内からは31名の会員が集まりました。

総会は近藤四国支部長（昭和28年卒）の挨拶で始まり、経済が沈滞する日本において、頼るべきは「学問」であり、特に、京大の役割が非常に重要である、京都の雰囲気は今後の日本経済に与える影響は大きいという旨のお話がありました。

次に近藤会長よりご挨拶を頂きました。これまで京都においては、蹴上発電所が中心となつて始まった第1次ベンチャービジネス時代、戦後の第2次ベンチャービジネス時代を経験してきたが、不況の現代には、第3次ベンチャービジネス時代が期待される。その中でも創造性の豊かな大学発のベンチャービジネスが活発化しており、数年後には花開くと思われるという将来への期待が膨らむお話をいただきました。

大澤先生からは主に桂キャンパスへの移転と21世紀COEに関するお話を頂きました。桂キャンパスへの移転については、電気系建物の玄関や4階から京都側を見た風景などの最近の写真をご持参いただき、非常にわかりやすく説明していただきました。

続いて、会務報告の後、懇親会に移り、富田先輩（昭和23年卒）の乾杯音頭に始まり、先生方や久しぶりの友人と酒を酌み交わしな



がらの歓談などしているうち、あつという間に予定の時間は過ぎ、最後には、恒例となりました「道遥歌」と「琵琶湖周航の歌」の合唱で懇親会を締めくくりました。

その後、近藤先生、大澤先生を始め有志一同は同ホテル21階のバーにて、高松の夜景を眺めながら深夜まで親交を深めました。

翌日、大澤先生は四国支部メンバー有志と一緒に志度カントリークラブにてゴルフを楽しみました。

吉本浩二（平成5年卒）記

### 関西支部総会報告

平成15年度の関西支部総会は、6月15日（日）に京都タワーホテルにて昭和15年卒業の大先輩から平成10年卒業の若手まで50名の参加を得て開催いたしました。

総会では、皆川支部長より「平成14年度は洛友会にとつて50周年という大きな節目であったが、今

後新しい時代を迎え、産官学の核になるなど新たに発展していくことを願っている」との挨拶の後、議事として平成14年度事業報告ならびに決算報告、平成15年度事業計画ならびに予算編成、平成15年度関西支部役員改選について審議され満場一致で承認されました。

平成15年度の新役員は、

支部長 細田純一郎（昭36年卒）

副支部長 三木 弼一（昭37年卒）

総務幹事 山本 博士（昭49年卒）

会計幹事 小橋 一志（昭54年卒）

の各氏です。なお、今年の関西支部の家族見学会は10月26日（日）に「風力発電機見学と大塚国際美術館見学」で淡路島、徳島へ行く予定です。関西支部会員の方は、奮ってご参加頂きたいと思えます。

続いて、細田新支部長から「経済情勢が厳しい中、せめて同窓会は明るく、楽しくやっていけるよう頑張っていきたい。皆様の周りの会員の方々にもお声掛けをお願いしたい。」とのご挨拶があり、最後に荒木先生より大学の近況報告として、桂キャンパスへの移転状況や研究教育拠点形成に向けた取り組みについてご報告をいただきました。支部総会を無事終了しました。

支部総会終了後は、恒例により懇親会に移りまず近藤会長から「洛友会と大学がもっと近づくべき」との叱咤激励を込めたご挨拶をいただいた後、皆川支部長の乾杯により懇親に移りました。日頃なかなか顔をあわすことのない方々との和気あいあいの歓談の途



中には細田新支部長から家族見学会のPRを兼ねたご挨拶もいただき、2時間という長いと思われた時間もあっという間に過ぎました。最後に昭和32年ご卒業の西台氏の先導により「洛友会の歌」を全員で合唱し、三木新副支部長の閉会のご挨拶により来年の再会を誓い散会となりました。

福田 隆(昭57年卒) 記

### 関西支部 ゴルフ競技会報告

第79回関西支部ゴルフ競技会が平成15年5月52日(日)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は、強い風が吹く中、昭和27年卒の松岡茂朗氏を筆頭に、合計26名(うちシニアの部8名)が競技に汗を流しました。

結果は次の通りです。

- (シニアの部)
- 優勝 中堀 増夫(昭30年卒)
  - 2位 西村 勝(昭34年卒)
  - 3位 伊藤 俊一(昭34年卒)
- (一般の部)

優勝 山本 博士(昭49年卒)

2位 吉田 豊彦(昭56年卒)

3位 三崎 博夫(昭40年卒)

△第80回競技会のご案内▽

平成15年10月19日(日)

於 武庫ノ台ゴルフコース

多数のご参加をお待ちしております。

△連絡先▽

関西電力

- 八木 誠(昭47年卒)
- 中山 正人(平9年卒)
- 06・7501・0355
- 中山正人(平9年卒) 記

### 北陸支部総会

平成15年6月21日(土)金沢市「加賀石亭」において、平成15年度北陸支部総会を開催いたしました。前日までの雨空が嘘のように晴れ渡り、暑い一日となりましたが、本部から近藤文治会長、教室から佐藤亨先生をお迎えし、合計21名が出席して行いました。

総会では中島支部長の挨拶で始まり、引き続き近藤会長のご挨拶へと続きました。近藤会長からは、今年洛友会が50周年を迎えるにあたり、昭和27年の創立時の思い出話、それ以来何らかの形でずっと本会の運営に携わっていること、昭和58年の30周年記念事業では創立30年誌の作成及び洛友会名簿の電算化をしたこと、さらに最近では大学の独立行政法人化に伴い洛友会も今後のあり方を検討しなければいけない時期にきていること

等についてお話を伺いました。

次に佐藤先生から、教室の近況として桂キャンパスへの移転計画、電気系教室の人事及び21世紀COEプログラム「電気電子基盤技術の研究教育拠点形成」事業について詳しくご説明いただきました。特に桂キャンパスについては次週から化学系教室の引越しが始まり、電気系教室も今年移転することでした。

その後、支部幹事のほうから支部近況報告、会計報告、役員改選に関する議案が報告され、原案どおり承認されました。

総会終了後の懇親会は、加賀伝統の朱塗りの壁の大広間にて、治部煮などの加賀料理を肴に金沢の美味しい地酒に舌鼓をうちながら、先生方や先輩・後輩、友人と



酒を酌み交わして歓談し、楽しい一時を過ごしました。最後に琵琶湖周航の歌を合唱し、万歳で散会となりました。

村島孝一(昭61年卒) 記

### 事務局だより

#### お詫びと訂正

前号(200号、洛友会創立50周年記念特別号)に一部誤りがあり、お詫びして訂正いたします。

- ① p22、1段目後より4行目(誤) ノートを盗る
- (正) ノートを取る
- ② p22、3段目、関野弥三先生の出身地と出身校
- (誤) 新潟県e田市
- (正) 新潟県高田市
- (誤) 市立東京理学校
- (正) 私立東京理学校
- ③ p23、1段目、1行(誤) 卒業生を各種学校のため
- ： 講習所は各種学校のため
- ④ p23、1段目、3行(誤) 最高学府の戦死が多々野講義を…
- (正) 最高学府の先生方の講義を…

### 編集後記

梅雨明けとともに猛暑の到来となり、全国各地では夏祭り賑わ

うようですが、今年の関西は阪神タイガースの快進撃に、一十億円?の経済効果が期待され、熱くなっています。

イラク戦争、SARSが終結し、株価がやや回復傾向で、先行きに僅かな明るさを感じられます。

前号の事務局だより欄でお知らせしましたように、会費未納(平成14・15年度)の方には会報をお届け出来なくなりました。お忘れの方は7月号の振込用紙が最終となります。

事務局のメールアドレス <e-rakuyu@sea.plala.or.jp>

事務局 記

### 訃報

昭5	飯田 善作	15	1	10
昭8	山本 茂	15	3	2
昭9	北井 方	15	4	27
講昭12	石田 良雄	14	12	3
講昭14	四ノ川正一	14	2	12
講昭15	田中 勉	14	2	12
昭20	川北 良之	15	1	21
昭21	池上 芳郎	15	2	8
昭24	太田 弘	15	2	8
昭25	大谷 清二	15	6	7
昭27	石割慶四郎	7	6	8
昭27	星 詢	15	4	14
昭28	赤石 熙	15	2	21
昭28	松本 安正	15	1	9
昭30	堀木 光也	15	1	9
昭48博	若谷 誠宏	15	1	9

以上の方々をご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。